

第3章 フリーハンドの総合学習

第6節 集団づくりとしての総合学習

「集団づくり」の視点を欠いた総合学習などあり得ません。そういう意味では、わざわざ「集団づくり」の節を設けるのも変な話です。これから紹介する2005年度の記録は、「なかま」そのものをテーマにしています。特異な実践ですが、そのために集団づくりがより見えやすいのではないかと思います。

■映画「きらきら～いのち、かがやいて～」■

この文章は、2006年3月にまとめた2004年度6年生と2005年度6年生の記録「学級集団をどう作るか」の一部です。2005年度の記録の前半部分は、「第1章 学級経営よもやま話」「第5節 50日が勝負」の中で「■「1ヶ月で勝負」したクラスの記録■」として紹介しています。そちらをご一読後、本稿に進んでいただくと、取り組みの背景が見えてくると思います。

1 映画「きらきら～いのち、かがやいて～」

勝負の2学期。

映画のことは先輩から聞き及んでいて、自分たちも作りたいという。問題は中身だ。実態から考えれば、個別の人権問題を扱うよりも「なかま」をテーマにした方がいいだろうと思えた。18年振りに「しばてん」で勝負することにした。「連凧」の材料は4月から用意している。タイミングの問題だ。

「しばてん」はていねいな読みの授業を行い、ポイントとなる場面での詳しい話しかえは授業通信で子どもに返していった。私としては、物語の最終部分にこれを題材とする意義があるのだが、…。

太郎はなぜ何も言わなかったのか



太郎は、あらなわでしばらく、役人にひき立てられて行って、そのまま帰ってこなかった。

【テキスト25ページ】

太郎が役人に引き立てられていった場面で、太郎の心の中のつぶやきを書いてもらいました。分類すると、およそ4つのグループに分けられるように思います。

■なんでやねん(村人に対する怒り)

略

■村人を救えるのなら(自己犠牲)

略

■未練

略

■あきらめ

○村人たちが全員おいらのせいにするんだったら、もう連れて行かれやんなしょうがないなあ。

○村人はおれのことをしばてんあつかいしたままだろう。今逃げても、何かもめごとがあれば、同じ事だ。

いくつか疑問が残ります。「怒り」が強いのなら、なぜ何も言わなかったのでしょうか。本当のことをしゃべればいいと思うのですが。「自己犠牲」で捕らえられていくなら、もうちょっと清々しい表情でもないのでしょうか。挿絵の目は、憂いうれに満ちているように見えます。「未練」があるならば、やっぱり真実かうらみつらみをしゃべるのではないのでしょうか。「あきらめ」というのは、誰に対して、何をあきらめていたのでしょうか。もとより「正解」などありません。次の場面まで疑問と課題をあたためていってもらえれば、それでいいです。



『きらきら』No. 83(2005.9.27)

秋祭りに村人たちは何思う

【テキスト 26 ページ】ラストシーンで、秋祭りが来るたびに村人たちは太郎の何を思い出しているのでしょうか。村人のつぶやきを書いてもらいました。分類すると、3つのグループになりました。

■なつかしい思い出

略

■深い後悔の気持ち

略

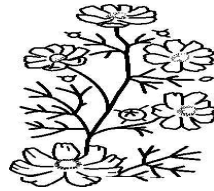
■役人に引かれて行った時の太郎の気持ち

- なんであの時太郎は何もせず、何も言わなかったんだろう。
- 悪いことをしたなあ。自分たちのために、太郎は身を役人にあずけたんだなあ。太郎は命の恩人だなあ。多分、生きてはいないだろう。ありがとう。太郎。おまえは、しばてんなんかじゃあなかったよ。

問題を整理してみましょう。まず、思い出すのは「勝ち抜き相撲」の場面なのか、「役人が来た」場面なのかという問題です。これは、圧倒的に「役人が来た」場面が多数でした。次に、それは「なつかしい思い出」なのか、それとも「後悔の気持ちをともなう思い出」なのかという問題です。分類の1つめと2つめの違いは、そこにあります。作者は、倒置法を使って「自分たちの心に、いつからか住んでいるしばてんのことを思いながら」太郎のことを思い出すと書いています。

倒置法には作者の強い意図が感じられます。波線部分はどういう意味でしょうか。そこに、「後悔」の中身がかくされているように思います。分類の3つめとして、数は少ないし、内容もまだまだ不十分だと思いますが、太郎の気持ちをつぶやきの中身に行っている人がいました。これはとても大事な視点だと、ぼくは考えています。

田島さんは、『しばてん』とぼく』という文章を書かれています。みんなでそれを読んで、その後でもう一度この場面に戻りたいと思います。役人が来た時の村人の気持ちや、あの時どうすればよかったのかを振り返りながら、ラストシーンのつぶやきに再挑戦しましょう。



■小学校6年・学年つうしん

きらきら

2005.10. 6(木)

MORE No. 90

映画作りいよいよ始まる

10月のおとずれとともに、いよいよ映画作りが始まりました。

映画のタイトルは、「きらきら ～いのち、かがやいて～」です。主題歌には、梅原司平さんの「かけがえのない生命」という曲を使わせていただきます。タイトルと主題歌にはそこに込めたぼくの強い思い

かけがえのない生命

作詞・梅原司平

胸の奥からこみ上げる この歌声はどこから
涙の上に築かれた 遠い母の歴史から
今日もどこかで生まれくる あの産声はどこから
子どもの夢と幸せを 願う母の心から
閉じこめないで 夢を 諦めないで 愛を
かけがえのない 生命
かけがえのない この道

誰の上にも惜しみなく そそぐ陽射しはどこから
愛に溢れて立ち上がる 目覚めた母の中から
耳を澄ませば押し寄せる あの足音はどこから
平和の波に沸き上がる 私たちの未来から
描き続けた 夢と 求め続けた 愛と
かけがえのない 生命
かけがえのない この道

があるのですが、それは映画が完成した時にお話することにします。というよりも、それをきみたちに見つけてもらいたくて、映画を作ろうとしているのです。

映画は、凧作りの場面で始まり、学級会のシーンがあって、メインの「しばてん」のあと、連凧を揚げている場面で

終わります。一見バラバラに見える各場面が、一本の糸でつながったとき、この映画のテーマが浮かび上がってくるはずです。

「しばてん」の配役が決まりました。シナリオの読み合わせ、立ち上げいこ、ロケ地でのリハーサル・本番と、本格的に活動開始です。

■ ■ 小学校6年・学年つうしん

きらきら

2005.11.21(月)

MORE

No. 115

「しばてん」授業通信⑥

秋祭りに村人たちは何思う②

9月28日「きらきら」No. 84の続編です。ラストシーンのつぶやきに再挑戦しました。映画作りの中でみんなの思いがグンと深まったように思います。

■ つぶやきの内容を分類すると、

① 「すまなかった」という気持ち… 13人

○おらたちは、おまえをばけものだからと言って役人に差し出してすまなかった。おまえは、ばけものでもない、しばてんでもない、人間の子の太郎だったよ。

② 犠牲になってくれた太郎への感謝の気持ち… 14人

○太郎、おまえが役人に連れて行かれるとき抵抗しなかったのは、おまえはやさしいやつだから、ぎせいは少ない方がいいと思ったんだろう。

○役人に連れて行かれるとき、太郎が抵抗しなかったのは、おらたちの命を救ってくれたんじゃないかな。

○役人が来た時、全部しばてんがやったと言ったら、一人役人に連れて行かれた。きっと、村のみんなを助けてくれたのだから。ありがとう。

○太郎は何も言わずに連れて行かれた。きっと太郎は、ぼくが死んだら村人たちが助かると思ったから、何も言わずに連れて行かれたのだから。

○きっと太郎は、自分一人が引き立てられていけば村の人は助かる。死ぬのはいやだけど、引き立てられようと思ったにちがいない。太郎は本当にいいやつだったなあ。

③ 「死にたくなかった」という気持ち… 6人

○おらたちは死罪になりたくないあまり、長者の米を食ったのが太郎だと言ってしまった。

○私らはただ死ぬのがいやで太郎に全部罪をおしつけてしもた。

○私は、死ぬのがいやだったんだ。自分のことしか考えていなかった。ゆるしてくれ。

○あの時は自分が助かりたかったばかりに、しばてんですと言うてしもた。本当にすまなかった。助かりたかったばかりに言うてしもた。

○役人に連れて行かれて殺されるのがいやだった。だから、わしは太郎に罪をなすりつけてしまった。

④ 「仕方なかった」という思い… 4人

○太郎、すまなかった。太郎だけのせいにして。でも家族を守りたかったんだ。

- 実はなあ、おらたちが太郎のせいにしたのは…。お前は捨て子だから、家族をまきこむことはない。おらたちには家族があるから、まきこみたくなかったんだ。
- 太郎一人のせいにしてすまなかった。けれど、これしか村人が助かる方法はなかったんだ。
- 太郎は捨て子だし、一人ですむと思った。だから、みんな太郎だと言った。ごめんよ、太郎。許してくれ。

⑤太郎の悲しみ、あきらめ…4人

- きっと太郎はしばてんと言われて悲しかったやろに…。
- 太郎がおらたちもやったことも言わず、強い力を持っているのに役人をやっつけなかったのは、どうせ自分がまた村から追い出されるからと思い、仕方なく何もしなかったのかもな。
- 今から考えると、おらたちがしばてんですなんか言ったから、あきらめたのかなあ。
- あの時、太郎はどんな気持ちだったのだろう。とっても悲しかったんだろうなあ。

No. 84 で「役人に引かれて行った時の太郎に気持ち」が大事な視点だと書きました。②と⑤がそれにあたります。②だと、太郎は死ぬことで村人とつながったことになります。⑤だと、太郎と村人は結局つながれなかった、なかまになれなかったということです。両方あっているのですが、ぼくは⑤だと考えています。参考までに、18年前のぼくのクラスの子が書いた「つぶやき」を紹介します。

■太郎にはほんとにすまないことをした。わたしらは、太郎をうら切った。あの時のわたしらは、太郎の気持ちを考えなかったのよ。あの太郎の悲しそうな目が、心にやきついてはなれやしない。太郎は、なにも言わなかったけど、心の中はさげびたいほど悲しかったにちがいないわ。

■わたしら、太郎を自分らの都合のええようにばかりしとったなあ。でも、太郎は文句一つ言わずに、わたしらを助けてくれた。長者さまの倉を打ちこわしに行った時も、役人が来た時も……。役人が来た時、長者さまがどれほどひどい人だったかをきちんと言っとれば、あるいは……。役人に連れて行かれる時、きっと太郎は、わたしらのことあきらめていたんだわ。だから、「この村の人たち、みんなが米を食べたんだ。」とは、言わなかったのねえ。さあ、いよいよラストシーンのシナリオを作ります。

時代の変化なのか、たまたまそれだけのことなのかは不明だが、かつてとは読みの質が違う。もどかしさが残る。

映画「きらきら～いのち、かがやいて～」

濱■	4月22日 友だちって何だ 濱■■■
	家に帰って、寝る時によく思うことがある。それは、人はなぜ他人とじゃれ合うんだらうと思う。大体、なぜ友だちというものが存在するんだらう。他人との関係など、ただの知り合いかそれとも敵とした方がよっぽど楽だと思う。
今■	今日は、「友だちって何だ」というテーマで話し合います。意見のある人は、手を挙げてください。
長■	ぼくは、いっしょに勉強したり遊んだりする人が友だちだと思います。
宗■	ぼくも、いっしょに遊んだり、いっしょにどこかへ行ったり、いっしょに勉強したり、ときには助け合うのが友だちだと思います。
藪■	私は、友だちというのは分からないことがあれば教えてくれたり、いっしょに帰ったり、遊んだり、話をする人だと思います。それから、忘れ物をしたら貸してくれる人も友だちです。
幸■	違った意見の人はいませんか。
大■	私は、心からお互いのことを分かり合っている同士で、言いたいことが言い合えるのが友だちだと思います。ただ単に遊んでいるだけの人は、友だちとはちがうと思います。
北■■■	私も、家族に相談できないことがあると相談にのってくれる人が友だちだと思います。私にとっては、何かをとおりこして尊敬し合う大切な人です。
上■	ぼくにとって友だちというのは、相談相手になってくれる人です。北■■■さんの意見に賛成です。
■西	私は、本当のことを言い合える人が友だちだと思います。
今■	二つの意見に分かれてきました。他に意見はありませんか。
■	私は、“友だち”というのは2種類あると思います。表面だけの『外だけ友だち』と、しっかり分かり合える『本当の友だち』です。私自身は、良いことは良い、まちがっていることはまちがっていると言い合える人が友だちだと思っています。
濱■	ぼくが言いたかったことは、一緒に遊んでじゃれあうだけの関係ではなくて、信じられる友だちを作ろうとしたら、他人の心に入り込んでいくことになると思います。それがトラブルのもとになるし、わずらわしいことです。だから、他人との関係など、ただの知り合いかそれ

	とも敵とした方がよっぽど楽だと考えたのです。
木■	私は、今まで友だちについて深く考えたことはありませんでした。自分がつらいときにはげましてくれる友だちは、ほんとに大切だと思いました。どう言えばいいのかあまり分からないけど、友だちはいっしょにいてとっても楽しくて、けんかしてつらかったりすることもあるかもしれないけど、やっぱりどれだけつらかってても友だちという大切な存在は必要だと思います。
的■	濱■くんの言うとおりでないと楽でいいけど、でもその方が悩みとかを話せなくなってつらいと思います。ぼくは、答えを出すのは、すごく時間がかかるような気がします。今はまだ考えがまとまらないので言えないけど、いつか答えが出るも知れないし、一生出ないかも知れません。でも、友だちはかけがえのない人ということは、ぜったいに言えます。
宗■	ぼくは、みんなの意見を聞いていて、人とのつきあいは難しいなと思いました。
ナレ	話し合いは結論が出ないまま終わり、私たちは『しばてん』に取り組むことになりました。

しばてん 0. 紙芝居

F I	紙芝居01
ナレ1	太郎は、泣かないあかんぼうだった。ふんづけても、谷そこへけ落としても、けろりとしている。親なし子といわれても、すて子とからかわれても、けっして泣かない子どもだった。
F I	紙芝居02
ナレ2	その太郎が、馬のとめ吉を見たたん、ぎやっと泣いた。太郎のしりっぺたには、おまけに、ひづめの形のあざがあったので、
村人①	こいつは、しばてんの生まれかわりやないやろか。
ナレ3	だれかがこっそり、そう言った。
F I	紙芝居03
ナレ4	そのしばてんは、すもうがすきで、每ばん村の道にあらわれては、
しばてん	おんちゃん、すも とろ。
ナレ5	とって、百しょうを投げとばす。 投げとばされた者は、そのあしたから、足こしが立たなくなって、ひと月も野らに出られない。
F I	紙芝居04
ナレ6	そこで、村じゅうより合って、

村人②	しばてんをやっつける、なんぞよい手はないかのう。
ナレ 7	と、そうだんぶって、
村人③	しばてんのかまえちよりそうな夜道に、あばれ馬のとめ吉をはなしてみるかよ。
ナレ 8	ときめた。
F I	紙芝居 0 5
ナレ 9	その夜も、しばてんは、土手の下にしゃがんで、すもうのあい手を待っていた。
しばてん	今夜は、近ごろ思いついたすくい投げのうまい手をためしてみちやる。
ナレ 1 0	と、じりじりしていたもんだから、暗やみをとんできたのがとめ吉だとは、気づくはずがない。
しばてん	おんちゃん、すも とろ。
ナレ 1 1	と、とびかかっていった。
F I	紙芝居 0 6
ナレ 1 2	しばてんは、とめ吉に思いきりけつとばされて、とおくとおく、やみのかなたへきえた。 そのあと、夜道でしばてんに出あった者はいない。
F I	紙芝居 0 7
ナレ 1 3	村のはずれに、あかんぼうの太郎がすててあったのは、このできごと のすぐあとのことである。

しばてん 1. 秋祭りの勝ち抜き相撲

ナレ 1 4	太郎は、村びとたちに育てられ、すもうばかり強いがき大しょうになった。 ある年の秋祭り、勝ちぬきすもうの土ひょうへ、はじめて太郎がのぼった。
子ども 1	太郎兄ちゃん、がんばってや。
子ども 3	ぜったい、太郎兄ちゃんが勝つって。 (土俵の上で、太郎と村人 1 が向き合う。)
村人 1	子どもか。
村人 2	こりゃ、ちび。でべそひきぬかれんうちにおりてきい。
村人 4	そうじゃそうじゃ。
村の女 1	あの子ども気の強い子ねえ。子どもは個々で見ているといいものを。
行司	ハッケヨーイ、ノコッタ。 (太郎、村人 1 を軽々と投げ飛ばす。)

村人5	おい、太郎が勝ったぞ。
村人6	まぐれよ。
村人3	よし、次はおれが相手だ。
行司	ハッケヨーイ、ノコッタ。
	(太郎、村人3を投げ飛ばす。)
	(村人4・5・6は尻込みする。)
村人2	そいじゃ、村一番のおれさまが相手じゃ。
行司	ハッケヨーイ、ノコッタ。
	(太郎、村人2も投げ飛ばす。)
子ども1	ヤッター、太郎兄ちゃんの優勝だ。
子ども4	でしにしてほしいなあ。
村の女2	育ててもらった恩のある衆らを、何もあんなに投げ飛ばさなくてもええに。
村の女3	ほんに。(子どもに向かって) あんな子と友だちになってはいけないよ。何をされるかわかったもんじゃない。
村の女4	そうだよ。もう、遊んだりしちゃいけないよ。
長者さま	(つぶやくように) こんな強いやつがいては、困ったことじゃ。

しばてん 2. 太郎をえぼし山へ

2-1

F1	村人たち集まってきて世間話
村人4	きのう、太郎のヤツとすもうとった衆らな、みんな足腰が立たんで、寝込んでるそうやで。
村人5	野良仕事もできんし、とんださいなんじゃ。
年寄り1	やっぱり、太郎のヤツは、(声をひそめて) しばてんの生まれ変わりかも知れんのお。
村人6	太郎は、しばてんの生まれ変わりじゃ。
村の女4	そうじゃ、そうじゃ。
年寄り2	そんなに決めつけて言うもんじゃないって。太郎がかわいそうじゃ。
村の女5	おばあさんはそんなのん気に言うけど、(声を強めて) 太郎はしばてんにちがいないわ。
村の女4	(大きな声で) きっと、そうやわ。
長者さま	(いつの間にか話の輪に入ってくる。ゆっくりと、きっぱりと) みなで米つぶ出しおおて、育ててきたけど、こんなきみ悪いばけものは、村にやおけん。
村人6	そうじゃ、あんなやつは村にやおけん。

村人5	しばてんを村から追い出せー。
-----	----------------

2-2

F1	村人たち、手に手にぼうきれや石を持ってさわぎ出す。
村人4	しばてんめ、村から出て行け。
村人5	二度と村に来るな。
太郎	おらは、しばてんじゃない。太郎だよ。
村人6	うるせえ。しばてんのぶんざいで。
太郎	おらが何をしたと言うんだよ。どうして、追い出されなきゃならないんだよ。
子ども1	このやろう。(と、石を投げる。)
太郎	いたい。いたい。やめてくれー。
村人5	えぼし山へ追い上げろー。
太郎	ひどいよ。こんなのになげんのすることじゃないよ。
村人4	何をぬかすか。もともと捨て子のくせに。
太郎	助けてくれー。おらは、太郎だよー。
	太郎は、とうとうえぼし山へ追い上げられる。

しばてん 3. 日照り

F1	紙芝居30
ナレ15	月日はながれた。 太郎は、木の実、草の根をかじって、それでもなんとか生きていた。 けれどもあるとき、人間にあいたくなくなった。 その年は、日でりつつきだった。 太郎が、こっそり山からおりてきてみると、田んぼはかれ、村には食べ物がなかった。
子ども2	あっ、草や。(子どもが5人、草をめがけて走り寄る。)
子ども2	この草は、おらが見つけたものやぞっ。
子ども1	何を言うとするんじゃ。強いもんがえものにありつけるんじゃ。(子ども2を押しつける。)
子ども2	横取りはずるいやないか。(子ども1を押し返す。)
子ども1	ずるいも何もあるもんか。この世はな、強い者だけが生き延びるんじゃ。わかったか、このアホ。(子ども2をなぐりとばす。)
子ども3	私らにも分けてよ。
子ども4	そうや。みんなおなかすかして、死にそうや。独り占めはずるいわ。(子ども3と二人で子ども1にくっついてかかる。)

子ども1	そんなにほしけりゃ、とってみろって。(と言いながら、草を振りかざして逃げる。子ども2・3・4は後を追う。)
子ども5	(一人取り残される。) 私も、食べたい。(力なく言って、とぼとぼとついていく。)

3-2

ナレ16	ところがどうだ。長者さまの屋敷をのぞいてみれば…。
屋敷女1	ご主人さま、さあ、どうぞお一つ。(と言いながら、盃に酒をつぐ。)
長者さま	オットット。ウーン、うまいのお。またこの鯛の身は、とびきり酒に合うのお。
長者さま	うん、どうじゃ、おまえも。(と、妻に盃を差し出す。)
長者の妻	そうね。じゃあ、一杯だけいただこうかしら。
屋敷女2	それじゃ、私がおつぎしますわ。(酒をつぐ。)
長者の妻	あー、おいしい。体のしんまであたたまってきそう。このじゃがいものふかしたのも、とってもいいお味なこと。
長者の妻	さあ、お前たちもご飯になさい。
屋敷女1	ご主人さま。村じゃ日照り続きで食べ物がなく、木の実、草の根を奪い合ってるというのに、私たちはこうして毎日白いご飯をいただけて、しあわせですわ。
屋敷女2	本当にそうでございますわ。みんなご主人さまのおかげだと、毎日手を合わせておりますの。
長者さま	そうか、そうか。まあ、どんなに日照りが続こうと、お前たちが食べるぐらいはしれたものよ。えんりよせずに食べるがよいぞ。ワッハッハッハッ。

3-3

F1	(村人たち、長者屋敷の近くに寄ってくる。)
子ども5	おなかすいたよう。
子ども2	腹がひついて、死にそうじゃ。
子ども3	長者さまー、ごはんをくだせー。
子ども4	
村の女3	どうか、子どもらに食べるものをめぐんでくだせー。
村の女1	ややこを助けとうせ。おちちが出んきに。
村の女2	ややこだけでもおたのもうします。
年寄り1	おかゆでもええきに。
年寄り3	おかゆのしるだけでもええきに。

子ども1 | アーア、おれの頭ほどもあるおにぎりにかぶりついてみたいのお。

3-4

ナレ17	ところがどうだ。
番人1	ご主人さま、屋敷の周りに村のヤツらがいっぱい集まってきております。
番人2	腹がへった、死にそうじゃ、食べるもんをくれと、うるさく申しております。いかがいたしましょう。
長者さま	放っておけ、放っておけ。そのうちに、あきらめて帰るじゃろうよ。
番人2	しかし、ご主人さま。万一、百しょうらに死なれでもしたら、年貢がとれなくなるのでは…。
長者さま	ワッハッハッハ。まあ、その時はその時よ。心配せんでも、あいつらが死んだところで、土地を持たん百しょうのかわりなど、いくらでもあるってことよ。
長者さま	よいか。大事な米じゃ。あんなヤツらには、米つぶ、いや、ひえ一粒もやっってはならぬぞ。

3-5

番人1	おまえたちにやるものなんぞ、ひえ一粒もないわ。
番人2	さあさあ、早く帰れ帰れ。ぐずぐずしていたら、たたきのめすぞ。 (と、棒を振り上げる。)
太郎	(物陰に隠れて様子を見ている。しみじみと) 村の人らも、ひどいくらしをしていたんじゃのう。

しばてん 4. 寄り合い

ナレ18	そんなある日のこと、村では寄り合いがもたれた。
村人6	今日、みんなに集まってもらったのは、他でもない、この日照りのことなんじゃが、もう木の実も草の根も、およそ食べそうなもんは食い尽くしてしもた。
村人2	このままじゃと、年より、がきは死んでしまうぜよ。
村人6	まあ、最後まで聞けや。だからじゃ、どうしたらええもんか、みな の考えを聞かしてもらいたいんじゃ。 (一同、考え込む。)
村人5	村ん中で、食いもんのあるとこと言やあ、長者さまのとこだけだろ。 長者さまに、もう一度たのんだらどうじゃ。
村人4	そうじゃ。もう一度たのむんじゃ。みんなで何べんもたのんだら、

	長者さまだって、少しぐらい米を分けてくれるかもしれん。
村人 2	むだじゃ。今まで何度もたのんじやろうが。なんぼ頭を下げて、米 1 粒くれなかったでねえか。がまんなんねえ。
村人 6	だからと言うて、このままじゃと、みんなのたれ死んでしまうぜよ。おらな、ここへ来るときのがきとかかあの顔を思うと、切なくてな。がきが、「なんでもええきに食べもんをくれよう。」って、蚊の鳴くような声で言いよるんじや。そしたら、かかあが、「がまんせえ。今はどんなに言うても食いもんは出てこん。がまんせえ。」って、つらそうにな、がきの頭なでながら言いやがる。おら、つろうて、切のうて…。
年寄り 1	ほんにのお。長者さまも、わしらがいなくなったら、食うていけんじやろに…。
村人 3	いっそ、みんなでこの村から出て、よその村へ行ったらどうじゃ。
村人 2	よし、こうなったら最後の手段じゃ。みんなで長者の倉を打ちこわそう。(と、決心したように立ち上がる。)
村人 1	えっ、お前、なんちゅうおそろしいことを言うだ。いかん、いかん。そんなことしてみろ。ただじゃすまねえぞ。
村人 3	打ちこわしは死罪じゃ。おまけに、家族までまきこんでしまうし…。お前は、ちょっと血の気が多くてぶっそうでいかん。
村人 5	いや、おらは賛成じゃ。あのドケチには、それぐらいせんと分からんのじゃ。
村人 4	おらも行くだ。
年寄り 1	ちょっと待て。若いもんは長者さまのこわさを知らんのじゃ。倉には番人もおる。
村人 2	みなで行けば、番人なんぞこわくない。
村人 4	子どもが苦しんどる姿、おら、もう見てられねえ。おらが今、子どもにしてやれることは、腹いっぱい飯を食わしてやることじゃ思う。
村人 5	そうじゃ。このまま長者さまに苦しめられて死ぬなんて、まっぴらごめんだ。飢え死にするくらいなら、やれるだけやって、死んでった方がわしゃあええ。
村人 1	そうじゃの。長者さまをおそれていては、これからもこんな生活が続き、長者さまの言いなりじゃからのお。生きるためには、そうするしかないな。
年寄り 1	仕方あるまい。そうするか。
村人 3	ちょっと待ってくれ。打ちこわしは、しょせんどろぼうぜよ。おら、盗んだ米で腹を大きいはできん。

村人2	いいや、それはちがう。長者の倉につまっている米は、おらたち百しょうが作ったものじゃ。それを、長者が年貢じゃいうて取り上げたんじゃないか。おらたちは、おらたちの作った米を取り返すんじゃ。(と言って立ち上がり、こぶしをつきあげる。)
村人4	そうじゃ、そうじゃ。(と、こぶしをあげる。)
村人6	じゃあ、倉の打ちこわし決行じゃ。(と言って立ち上がる。)
村人全員	オー。(と、こぶしをあげる。)

しばてん 5. 打ちこわし

F I	(くわを持った村人たちが、長者屋敷に向かってくる。)
番人1	おいおい、なんだあいつらは。くわを持って、集団でこっちへ来るぞ。
番人2	村のやつらだな。よし、長者さまに知らせてくる。(屋敷に入っていく)

5-2

F I	(番人2が駆け込んでくる。)
長者さま	何事じゃ。騒々しい。
番人2	村のやつらがくわを持って、こちらへ向かってきます。いかがいたしましょう。
長者さま	何かと思えばそんなことか。なあに、腹を空かした百しょうどもなど、たかがしれておるわ。ちょっと痛い目にあわせて、追い返してしまえ。

5-3

村人1	(力尽きてたおれる。)おら、もうだめじゃ。腹がへって、腹がへって、もう1歩も動けん。
村人2	おい、しっかりしろ。
村人3	おらもだめじゃ。(と、たおれる。)
村人4	おらも動けん。(と、たおれる。)
村人6	おらもじゃ。(と、たおれる。)
村人5	みんなどうしたんじゃ。もうちょっとじゃというに。
村人2	そうじゃ、あきらめるでねえぞ。
番人1	やいやい、お前ら何しに来た。
番人2	生きて帰れると思うなよ。
	(2人して、村人2を打ちのめし、次に村人5をあっさり片付ける。)

	さらに、たおれている村人にも襲いかかる。）
村人1	(震えながら)おらたち、これでおしまいじゃな。
村人3	ああ、そのようじゃな。
	(突然、太郎が飛び出してくる。)
太郎	しばてんが助けに来たぜよ。(と叫んで、番人1を投げ飛ばす。)
番人2	しばてんが出たあ。(わめきながら、屋敷へ逃げ帰る。)
村人6	(立ち上がって)しばてんが来たぞう。
村人4	しばてんが助けに来てくれたぞう。
村人5	もう、これで安心じゃ。
	(村人ら、すっかり勇気づく。)

5-4

F I	(屋敷の女、長者の妻がパニック状態で逃げ回る。)
長者さま	(表の様子を見ながら)エーイ、めんどうなことになるわい。太郎のヤツめ、まだ生きていたのか。あの時に始末しとくんじゃった。(とつぶやき、表に飛び出していく。)

5-5

F I	(屋敷の女、長者の妻、番人が逃げ回る。)
長者さま	こわがるなちゃ。こいつは太郎じゃ。(と叫んで、太郎に飛びかかっていく。)
	(太郎、長者を空のかなたへ投げ飛ばす。女ら、泣きわめきながら逃げていく。)
村人2	やったあ、勝ったぞお。
村人3	そうじゃ、勝ったんじゃ。腹いっぱいめしが食えるんじゃ。
村人5	ああ、そのようじゃな。これでがきは助かる。みんな太郎のおかげじゃ。
	(村人たち、互いに肩を抱き合いながら喜び合う。)

しばてん 6. 豊かで楽しい日々

ナレ19	長者さまの倉からはこび出した米だわらは、みなで分けあった。 (村の女と年寄りが集まってきて世間話をしている。)
村の女4	白い米のご飯が腹いっぱい食べられるなんて、夢みたいじゃ。
村の女1	おかげで、おちちもよう出るようになって。ややこが喜んですいついて。
年寄り3	ああ、わしの病気もすつとんでしまったわ。

年寄り1	それもこれも、みんな太郎のおかげよのう。
年寄り2	ほんと、太郎さまさまじゃ。
村の女5	盆と正月がいつぺんに来たと言うけど、それが10年分もまとめて来たみたいね。
村の女2	ほんとねえ。
村の女3	
	(女、年寄りが話しながら去った後に、子どもと太郎がやってくる。)
子ども3	太郎兄ちゃん、だっこして。
子ども4	私もだっこして。
子ども5	私が先よ。
太郎	ワ、そんな一度にはできないよ。一人ずつ順番にしてやるからね。
子ども1	太郎兄ちゃん。そんなだっこより、すもうをしようよ。
太郎	すもう。ああ、久しぶりだなあ。あの秋祭り以来だなあ。よっしゃ、やるか。
子ども2	ワイ、やったあ。
	(太郎と子どもが組み合っているところへ、野良仕事に出かけていく村人らが通りかかる。)
村人1	おい、太郎。ちょっとは手加減しろよ。
村人2	お前の力にかかっちゃ、かなわねえからよ。
太郎	へへへ、分かってるって。
村人4	さあ、おらはまた働くぞー。
	(村人ら去っていく。)
村人2	ちょっとばかりくやしいけど、仕方ねえな。(とつぶやく。)
村人4	何が。
村人2	うーん、いや、いい役を太郎に取られてしまったと思ってな。
村人3	ハハハ、それは仕方ないさ。何と言ってもあの力だもん。
村人4	太郎に不足など言うとなら、バチが当たるってもんよ。

しばてん 7. 太郎、連れて行かれる

F1	(役人が村へやってくる。)
ナレ20	しかし、そんな豊かで楽しい日々も長くは続かなかった。ある日のこと、役人が村へ来た。
役人1	長者の倉の米俵を盗んだヤツは、だれだ。(と、よばわる。)
	(村人ら、黙ってひれ伏している。)
役人2	長者の倉の米を食ったヤツは、だれだ。(と、どなる。)
子ども5	う、うわぁー、おかあちゃーん。こわいようー。

役人 2	うるさい子どもだ。泣きやまないか。
役人 1	さあ、だれがやったのじゃ。名乗り出よ。
子ども 4	あ、あの、わたし…。
役人 1	うむ、なんだ。
子ども 4	いえ、なんにも…。
役人 2	さあ、ぐずぐずせずに名乗り出よ。ちゃんと調べはついているんじや。
	(村人ら、震えながら下を向く。)
ナレ 2 1	みな、ふるえながら考えたのは、しばてんのことだ。 あいつはばけものだから、やすやすとなわをぬけられるだろう。 うちくびになっても、にいとわらって、生きかえるにちがいない、と村びとたちは思った。
村人 2	しばてんです。
村人 5	しばてんが全部やりました。
村人 1	そうです。しばてんです。
村人 6	しばてんがやりました。
村人 3	しばてんが一人でやりました。
村人 4	そうです。間違いありません。
役人 2	そのしばてんというやつ、出てこい。
	(村人ら、太郎を役人の前に差し出す。)
	(役人ら、太郎を荒縄でしばり、連れて行く。太郎、無言のまま引かれていく。)
	(村人ら、その場にへたり込んだまま、じっと太郎が連れて行かれるのを見送る。)
ナレ 2 2	太郎は、そのまま帰ってこなかった。

しばてん 8. 秋祭り (ラストシーン)

ナレ 2 3	何年もの月日が流れた。 秋祭り。かつてそれは、収穫を祝う最も晴れやかな日であった。しかし、村人たちは、あの日以来、腹の底から笑い、心の底から喜ぶということがなくなった。かつて楽しかった日であればあるほど、心のどこかにつかえているものが、むっくりと起き上がってきて顔をのぞかせるのだった。
村人 1	今年も秋祭りがやってきたなあ。秋祭りの勝ち抜き相撲で、太郎に

	投げとばされたこともあったなあ。その太郎を、おらたちはばけものだからと言って、役人に差し出してしもた。すまないことをした。おまえは、ばけものなんかでない、しばてんなんかでない、人間の子の太郎だったよ。
村人 4	役人が村に来たとき、おら、死ぬのがこわくなってしまったんじゃ。自分が助かりたいばかりに、太郎に全部罪をおしつけてしもうた。本当にすまなかった。祭りじゃから言うて、おら、うれしい顔できねえよ。
村人 6	おら、しばてんがやりましたと言うしかなかっただ。あいつは捨て子だから、村にひがいを与えないし、谷底へ落としても死なないくらいだから、うち首になっても帰ってくると思うがのう。おら、家族を守りたかったんじゃ。
村人 2	太郎、おまえが役人に連れて行かれるとき、何も抵抗しなかったのは、おらたちの命を救ってくれたんだな。あのとき、太郎が本当のことを言ってりゃ、おらたちも連れて行かれるところだった。感謝してるよ。太郎、この村に帰って来いよ。もう一度、すもうをしたいでねえか。
村の女 2	わたしら、太郎を自分らの都合のええようにばかりしとったなあ。でも、太郎は、いつもわたしらを助けてくれた。長者さまの倉を打ちこわしに行った時も、役人が来た時も…。わたしらが生きているのは、おまえのおかげだよ。
村の女 3	あの時のわたしらは、太郎の気持ちを考えなかったのよ。太郎は、なにも言わなかったけど、きっと心が涙でいっぱいになるほど悲しかったにちがいないわ。死ぬのがいやで、自分のことしか考えられなかったのよ。ゆるしておくれ。
村の女 4	太郎にはほんとにすまないことをした。わたしらは、太郎をうら切った。役人が来た時、長者さまがどれほどひどい人だったかをきちんと言っとれば、あるいは…。役人に連れて行かれる時の、あの太郎の悲しそうな目が、心にやきついてはなれやしない。きっと太郎は、わたしらのことあきらめていたんだわ。だから、「この村の人たち、みんなが米を食べたんだ。」とは、言わなかったのねえ。

■ ■ 小学校6年・学年つうしん

きらきら

2005.12.15(木)

MORE

No. 127

きみたちは大きく成長したよ

きみたちの綴^{つづ}った文字を見ながら、このクラスはもはや9月初めのクラスとは別の集団になったのだと感じています。映画のオープニングシーンになっている討論会の原作である「きらきら」No. 77(2005.9.12)と読み比べてみてください。

■ 「しばてん」を終えて、「友だちって何だ」に対する考えを書こう ■

- 信じられる人、助けてくれる人、頼れる人、大切な人、一緒にいて安心できる人
- 以前の意見に付け足して、友だちというのは助け合ったりしてできる1つのきずなだと思ふ。
- 単に遊ぶだけでなく、いろんなことを相談できたり、悪いこと本当のことが言えるのが本当の友だち。
- 友だちとは、相手を信じることだと思っている。
- 心からお互いのことを分かり合える同士で、言いたいことが言い合えるのが本当の友だちだと思ふ。逆に、相手に相づちを打っていたり、一緒に遊んでいるだけの人は本当の友だちではないと思ふ。
- 友だちは一緒にいて楽しいし、私にとってはとても大切な人だと思ふ。
- 信じてくれるのが友だちです。何でも言い合えるのが友だちです。一緒にいて楽しいのが友だちです。
- 友だちというのは本当に信頼し合う大切な人。どんなにつらくても、絶対に裏切ってはいけない。でも、いけないものはいけないときちんと言えなければだめだと、私は強く思ふ。
- 友だちとはみんなで助け合って、信じ合うことだと思ふ。
- 友だちとは人という字だと思ふ。人という字は、人と人が支え合っている。友だちも相手が困っていたら助けてあげて、自分が困っているときは助けてくれる。それが友だちだと思ふ。

- 友だちとは助け合える人、いつも笑い合っている、とても大切な人だと思ふ。
- 友だちとは、とても大切な人だ。
- 友だちとは、つらい時も嬉しい時も一緒に悲しんだり喜んだりできる、自分にとって「心の支え」になってくれる人だと思ふ。
- 友だちとは一緒に何かをしたり、お互い助け合ったりするかけがえない人だと思ふ。
- 友だちというのは一緒に遊んだり、勉強したり、助け合ったり、笑い合ったり、相談に乗ってくれる人。
- 一緒に遊んだり、一緒に助け合うのが友だちだと思ふ。
- 友だちは一緒に何かをしたり、悩みを相談したり、時には助け合う大切な存在。
- 一緒に遊ぶだけじゃなくて、自分の考えを言い合えるのが友だちだと思ふ。
- 友だちは一緒にいて楽しいし、いろんなことを教えてくれる。友だちは大切な人だ。
- 友だちというのはとっても大切で、いつも一緒にいてくれる人。

こうして見てくると、「助け合う(支え合う)」「信じる」というのが友だちを表すキーワードになっていることが分かる。これは、「しばてん」と出合って学んだことと深く関わっている(別の号で紹介したいと思ふ)。加えて2学期には運動会があった。つげの子集会の発表もあった。それらの1つ1つにきみたちは鍛えられ、磨かれ、大きく成長した。心の中に「連凧」が揚がる日も、すぐそこまでやってきている。うれしいじゃないか、なあ、きみたち!



「しばてん」が残してくれたもの

「きらきら ~いのち、かがやいて~」のメインである「しばてん」の映画は、きみたちに何を残してくれたのだろう。

■あなたは、「しばてん」と出合って何を学びましたか■

- 命の大切さと人のせいにしないことを学んだ。なぜなら、村人たちが「しばてんがやりました。」と言って、太郎が死んでしまったからだ。

- 私は「しばてん」と出合って、信じるという気持ちを学んだような気がする。しばてんが村人を助けたのは、村の人たちを信じていたからだと思う。
- 「しばてん」と出合って、1人1人の大切さを改めて感じた。
- 相手のことをよく考えること。相手のことをちゃんと分かってあげることがとても大切なことだと学んだ。
- しばてんに出合って学んだこと、それは仲間を信じること。
- 「しばてん」と出合って、私は本当に信頼し合うのは難しいと思った。
- 苦しい生活や楽しくない生活の中で、みんなで一生懸命に生きてきていたので、そういうときこそ、みんなで助け合うことが必要だなあということを学んだ。
- しばてんの時代はすごく差別がきつかったんだなと思った。でも、その時代の人には差別に負けず、生きようとする気持ちを忘れないのはすごいと思った。生きるということをあきらめないということも学んだ。
- 1人1人の命の大切さ、村から追い出されても村の人を助けるという心の強さ、やさしさ、たくましさ。
- 私は「しばてん」と出合って人間の命の大切さ、言葉の重さ、人の持つ優しさ、人の心の温かさなどたくさんを学んだ。太郎は、いつも村人のことを大切にしていた。自分より人のことを大切にし、心の広い人だった。私はそんな太郎を見習いたいと思った。私は、「しばてん」に出合って仲間の大切さ、人の命の尊さ、人の心の温かさを知った。何より1番温かいのは人の心だと知った。そして、1番冷たいのも人の心だと知った。人に向ける心は、温かい心がいいと思う。冷たい心に向けられた人は、とてもつらいと知ったから。



○仲間の大切さを学んだ。仲間がいなければ、つらいことから立ち直れないこともあるだろうし、1人で明るく生きていくのは難しいと思う。つらい時にお互い分かり合えて、時に優しくし合えることは、すごく大事なことだと思った。「しばてん」では、最後の場面で太郎が村人をかばって役人に連れて行かれる場面があったが、太郎はすごく苦しかったと思う。でも、そのおかげで村人たちはその後何年も生きている。最初から村にいなかった太郎が村人を助けたことは、村人を守ろうとした太郎の気持ちが正直に出ていて、すごく悲しい場面だけど、仲間の大切さを教えてくれる場面でもあると思う。

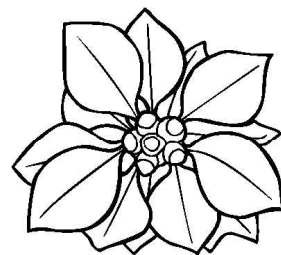
○仲間の大切さを学んだ。仲間がいなければ、つらいことから立ち直れないこともあるだろうし、1人で明るく生きていくのは難しいと思う。つらい時にお互い分かり合えて、時に優しくし合えることは、すごく大事なことだと思った。「しばてん」では、最後の場面で太郎が村人をかばって役人に連れて行かれる場面があったが、太郎はすごく苦しかったと思う。でも、そのおかげで村人たちはその後何年も生きている。最初から村にいなかった太郎が村人を助けたことは、村人を守ろうとした太郎の気持ちが正直に出ていて、すごく悲しい場面だけど、仲間の大切さを教えてくれる場面でもあると思う。

○太郎がしばてんじゃないのに村人たちにしばてんだと言われ、役人に連れて行かれた時、太郎は無抵抗で役人に連れて行かれた。その時、人を助けるのもアリだと思った。

○しばてんと出合って、ぼくは命の大切さと人のせいにはしてはいけないということ学んだと思う。なぜなら、村人が「しばてんがやりました。」と言って人のせいにしたために、太郎が死んでしまった。だから、人のせいにはしてはいけないと思う。

○私は友だちにきらわれていたら助けなかった。太郎はきらわれていても助けた。何があっても助けるということ学んだ。

○ぼくは「しばてん」と出合って、昔の人はとてもすごかったんだなあと思った。なぜなら、長者に米を取られて食べ物がない時、村人は倉を



打ちこわすことに決めた。でも打ちこわしは犯罪。ぼくならこんなことをする勇気がない。でも村人たちは打ちこわしをした。結果は成功。すごいと思った。ぼくは、しばてんからやる気があったら何でもできるということを学んだ。

映画の撮影がすべて終わりました。ぼくは今、思っています。きみたちにしばてんを出合わせて良かった、この映画を作った良かったと。あえて言わせてもらうけど、バラ色の友情やバラ色のクラスなんてどこにもありません。石ころがゴロゴロしているのが現実なのです。ある瞬間に心が通い合った、心が一つあかしになったと感ずることができたら、それが仲間である証なのだと思ひます。きみたちはいい仲間になったと思ひます。



『きらきら』No. 128 (2005.12.16)

連凧を揚げるタイミングは今しかない。12月15日。

12月15日 連凧が揚がった

今日は、急に球技場で凧を揚げることになった。初めてで、ドキドキした。みんなで、一つ一つ凧を出して行って、青が全部出終わった。私たちは、先生の「せえの。」で放した。1回目は落ちた。もう1回した。「せえの。」で揚がった。びっくりして、「すごい。揚がった。」しか言えなかった。でもすごかった。次に、黄、緑、赤の順に出た。風もいいぐあいだ全部揚がった。こんなにうれしいのは、久しぶりだった。みんなで力を合わせて作った凧が揚がってよかった。作ったかいがあった。無事に全部揚がって、よかったと思ひた。



12月15日 連凧

私たちが作った連凧が、今日、大空を舞った。とてもすごかった。凧が百枚ある。一つ一つに気持ちが込めてある凧は、勢いよく大空に舞っていた。すごくうれしかった。私たちの作った凧が、100枚一緒に揚がっている。さて、心の中のそれぞれの連凧は何枚まで揚がったのだろうか。卒業するまでに100枚揚げられるだろうか。

12月15日 連凧揚がる

1時間目からグラウンドへ連凧を揚げに行った。一人1枚ずつ凧を持った。先生の合図で手を放した。1回目、ドスッ。すぐに落ちてしまった。2回目、「揚がれ。」と心の中で思った。先生の合図で放した。ふわあと揚がった。「やったあ。」と思った。うれしかった。青・黄・緑・赤と順番に揚がっていった。すごくきれいだった。大空にきれいな連凧が揚がったので、今度は自分の心にきれいな連凧を揚げたい。



12月15日 連凧揚がる

今日、1時間目から連凧を揚げに近くのグラウンドに行った。グラウンドに着いて、箱から凧を出し、最初の青をみんな1つずつ持って、先生のかげ声でいっせいに放した。すると、「おおっ。」みんなの声とともに、みんなで頑張った連凧が大空に揚がった。嬉しかった。その後も、黄、緑、赤の凧を続けて揚げた。自分たちで作った凧が揚がっているのを見て、「うちのクラスも、あの凧みたいに全てつながっている立派なクラスになれるといいな。」と、私は思った。初めて見た連凧は、本当にきれいだった。

12月15日 大空に舞う連凧のように

「1、2の3。」先生のかげ声とともに、私たちが作った100個の連凧の先頭集団が揚がった。だんだんと糸をのぼしていき、100番目の凧が揚がった。とてもすごかった。なんだか感動した。あともう少し糸をのぼせなかったのは残念だったが、連凧揚げは成功を収めた。さて、私たちの心の中の連凧はできているかということ、私はあと少しだと思う。映画作りで、「友だちって何だ」について一人一人が自分の考えをみんなに伝えたり、一生懸命演技をした。それは、「一人一人がしっかりとした凧になる」というめあてにだんだん近づいてきていると思う。その一人一人のしっかりとした凧が、みんなで協力することによって、一つのすばらしい連凧になると思う。卒業まであと少し。私たちの心の中に連凧が揚がる日は、そう遠くはないはずだ。

子どもの日記を紹介した『きらきら』No.130(2005.12.19)は「心の中の『連凧』だって、きっと…」というタイトルになっている。その中で私はこうコメントした。「12月15日、■■の里に初雪が降りました。透き通るような青空に、私たちの連凧が舞い上がりました。なんとも言いようのない感動が、一人ひとりの心

を包んでいく、幸せな時間でした。最近の『きらきら』の繰り返しになりますが、きみたちはもはや2学期が始まった頃のきみたちではありません。きみたちは、もうぼくの力など必要としないほどに成長しました。大空に連凧が揚がった感動の一方で、心の連凧を思っていた人がこんなにもいたのです。心の連凧は、もう準備が整っていると、ぼくは感じています。あとは、いい風を待って、タイミングよく手を放せば(この間の1回目は、このタイミングが遅れたのです)、風をつかんで勢いよく舞い上がります。きっと…。3学期、風をつかむタイミングをじっと待ちましょう。」クラスは動き始めると加速度的に変わっていく。

2月21日、最後の授業参観で映画の上映会をした。自分たちの映画を見て、子どもたちは書いた。

2月21日 きらきら映画会

2月21日、ついに六年生が作り上げた「しばてん」の映画会が行われた。寒い日も頑張ったみんなの演技を見られるということもあって、私はこの日がとても楽しみだった。5時間目、パソコン室に集まり、親の人たちも一緒に映画を見た。連凧を作っている場面から始まり、しばてんの物語になった。みんなで頑張ってきたから、見たときは、「あの時、みんなと一緒に頑張ってきたからこそ、『友だちってなんだ』について深く考えることができたんだな。」と思った。最後らへんで、いっせいにあがる連凧が映っていた。寒いのも忘れて、とても嬉しかった。映画を見ると、今まで体験してきた全てのことが自分のためになったと、私は思う。クラスの一人ひとりが助けてもらったり、支え合ったりしたことは、すごいこと、進歩だと思った。卒業まであと少し、自分のために、みんなのために、最高の6年生で卒業したい。

2月21日 ついに完成

「では、はじめます。」今日の参観は、「きらきら～いのち、かがやいて～」の映画上映会だった。私は、この日をとても楽しみに待っていたのだ。いよいよ始まった。最初に連凧を作っているシーンが映った。ついこの間のように思うのだが、それは2学期だし、去年だ。なんだか変な感じになった。そして、待ちに待ったメインの「しばてん」だ。いろんな所で、ちがう日に撮ったシーンがしっかりとつながっていた。音楽もついていて、迫力があつた。その後の連凧があがるころも感動した。生で見た方が迫力もあつたし、感動もしたけど、それをもう一度見るとやっぱり感動した。

「きらきら～いのち、かがやいて～」を見て、改めて仲間の大切さ、命の大切さ、信じることの大切さが分かった。とてもすばらしい映画になっていた。この映画作りをやって、本当によかったと思う。しかし、このメン

バーで小学校生活をやられていられるのも、あと少ししかない。こんないい思い出ができ、今までに感じたことのないぐらいクラスが明るくなってきているのに、もうこのメンバーでこんなことをするのはないんだと思った。そう思うと、なんだかさみしくなってきた。中学校入学は、未来へふみ出す第1歩だ。でも、このメンバーで活動することは残り少ないのだと思うと、さみしくて、その1歩をふみ出したくないような気もする。なんだかすごく複雑な気持ちだ。あと残っている大きな行事は、6年生が送られる会と卒業式しかない。だけど、卒業までの1日1日を大切に、心のアルバムに残しながら、楽しく過ごしていきたい。

参観した家の方もメッセージを寄せてくださった。

■シリアスあり、笑いあり、じんとくる場面あり、とても素敵な映画でした。編集のすごさも光っていました。胸にじっとくるシーンがいくつもありました。最後の連凧をバックに一人ひとりの言葉が流れるシーンでは、思わず涙がポロリ。友だちについて、みんなしっかり自分の思いを持つことが出来たこと、素敵な宝物になったと思います。

■「しばてん」を見せていただき、とても感動しました。学級通信で制作途中の内容を聞かせてもらっていたので、頑張って作り上げた映画は本当に立派なものでした。子どもたちの一生懸命さと成長を感じて、何度か目が潤む場面もありました。全員で作った連凧が風とともに舞い上がる姿は、今のクラスのように思いました。これからも友だちを大切に、太郎のように思いやる心を忘れず歩いて行ってほしいと思います。

■映画を観て、涙があふれて止まりませんでした。すごく感動しました。それは、先生の映画の構成や挿入歌の相乗効果もあったのですが、これほど身近であり、分かっているようで難しい問題に取り組むことができた子どもたちには拍手を贈りたいです。最初はぎこちなかったセリフも、後半では役になりきって言えてましたね。友だちを見つめることができたと思います。貴重な体験をありがとうございました。これから一つ上の階段を上り、本当の友だちを自分の目で見つけ、一緒に笑って泣いて、時にはぶつかり、かけがえのないものを育ててほしいです。自分の心、そして人の心を大切にできればと思います。

■「しばてん」を拝見して、その出来栄えに感心しました。何回も練習したであろう少々照れながらのセリフ、場面ごとのBGM、先生と子どもたちのたいへんな努力のあとが見えました。この作品を通して人間の身勝手さ、優しさ、後悔など、人として大切なものをいくつも学んでくれたと思います。また、みんなの気持ちが一つになってこそ連凧が力強く空に舞い上がることも、忘れないでほしいです。

演じることで子どもは育ったのだと思う。課題を残しつつも、個々の子どもも集団も格段に輝きを増した。

2 エピローグ

■小学校6年・学年つうしん

きらきら

2005. 3. 1 (水)

No. 158

壁画「連凧」ついに完成！



ついに、私たちの壁画が完成した。私たちが壁画が、卒業にまた一歩近づいた。うれしい気持ちもあるが、やっぱり悲しい。みんないろいろ思いがあって、複雑な気持ちなんだと思う。それに負けないように、あと残りわずか、壁に描いた連凧は、私たちのたくさんさんの思いをのせて飛んでいる。たくさんさんの笑顔と、ととも飛んでいる。いづれは、この絵も消えてしまうけれど、私たちの描いた壁画は、一人ひとりの心の中にいつまでも今と同じ気持ちで力強く舞い上がっているだろう。楽しかった日々は、いつだってこのクラス二十五人で笑った合っていたのだから。大きな力でも二十五人で乗り越えたのだから。決して消えることのない大事な一人ひとりの思いがこもったものなのだから。

ついに完成、私たちの思い

2月末、壁画が完成した。3月2日、卒業遠足でナガシマスパーランドへ行き、楽しい1日を過ごした。翌3日は6年生を送る会で、子どもたちはお礼の出し物の劇に燃えた。もう1年あればなあと、そんな思いも幾分残る。

卒業前、子どもは書いた。

楽しかった、それとありがとう

私は、6年生になってから今までの約1年間で、このクラスはかなり変わったと思う。しばてんの映画制作や、連凧を作って揚げたり。みんなでいろいろなことをしたり、かべにぶつかったりするたびに、この25人は結束力が強くなっていったと思う。それは先生のおかげでもあるが、やっぱりみんなが、「変わろう。」そう思い、実行しようとしたから、1年間でこんなに変わったんだと思う。最後になったが、■■■小学校の6年生24人のみんな。6年間、楽しいときをありがとう。そして、中学校へ行ってもよろしく。

1年間の思い出

6年生になって1年がすぎた。この1年間にはいろいろな出来事があった。その中で、連凧、映画、壁画が心の中に残っている。初雪の朝グラウンドに行って揚げた100枚の連凧、感動した。次はしばてんの映画制作だ。壁画には一人一人の絵が描いてある。連凧も映画も壁画も、みんなの心が一つになったと思えるものだ。卒業まであと少しなので、残りの小学生生活がんばりたい。

これでよかったのだと思う。3月20日、卒業式、子どもたちは「よびかけ」で胸を張ってこう言った。

- (60) なかまの大切さと命の尊さを学んだ
- (61) 「しばてん」の映画制作
- (62) 自分の役を精一杯演じることで
- (63) 人の心の温かさと
- (64) 一緒にいる楽しさが分かりました
- (65) 初雪の朝、大空に舞い上がった
- (66) 100枚の連凧
- (67) 風を受けて揚がった瞬間
- (68) 感動で涙が出そうになりました
- (69) みんなの心が一つになった
- (70) 私たちの宝物です

- (74) 連凧は
- (75) 一つひとつがしっかりと独立した凧です
- (76) 連凧は
- (77) 独立した凧が1本の糸でつながった凧です
- (78) ぼくたちは
- (79) 一人ひとりが大きなしっかりとした凧になりました
- (80) 私たちは
- (81) みんなで力を合わせて
- (82) 大空に舞うきれいな連凧になりました
- (83) たくさんの思い出と
- (84) 多くの方々への感謝を胸に
- (85) 今
- (86) ぼくたち
- (87) 私たちは
- (88) 旅立とうとしています

続きは、一人ひとりの子どもが次のステージで演じてくれるに違いない。

本稿で紹介した

2005年度 6年 「きらきら ～いのち、かがやいて～」
については、DVDがあります。ご覧になりたい方はご連絡ください。